

日本の売薬 (1) 小児五疳薬

東京理科大学薬学部 ○遠藤次郎、中村輝子、田村一彦
九州大学大学院言語文化研究院 ヴォルフガング・ミヒェル

江戸時代以来、一般大衆の治療や保健に寄与してきた売薬は、今日においても、セルフメディケーションのための有効な手段の一つである。本報告では、一般に小児のひきつけ、夜泣きなどに用いられている、奇応丸、救命丸などの小児鎮静薬（小児五疳薬）について、これらの系譜をたどるとともに、処方内容ならびに小児五疳の病理観の変遷について考察した。

1. 現代の小児五疳薬

小児五疳薬は「小児鎮静薬」として『日本医薬品集』に記載されている。70 数社から市販されているが、それらの処方には「牛黄、麝香、動物胆、龍腦、人參、沈香、動物の角、サフラン」を含むものが多い。一方、これらの小児五疳薬と近似した内容の処方群が『日本医薬品集』の「強心薬（動悸、息切れ、気付）」の項に存在する。六神丸、稲荷丸、感応丸、等として知られる製剤がそれである。これらの処方内容は小児五疳薬に蟾酥を加え、強心作用を強めたものとなっている。逆の見方をすれば、小児五疳薬は危険を伴う蟾酥を除いた、小児向けの「強心薬」ということになる。

2. 江戸時代の奇応丸

現代にみられる救命丸、奇応丸のような処方は江戸時代の医方書には少なく、奇応丸と同名の類似処方が 1 例、見られるに過ぎない。

3. 江戸時代における小児五疳の病理

江戸時代における小児五疳の病に対する認識を整理すると、以下のようである。

①消化機能が不十分な乳幼児が過量の乳や甘味（疳の字義はこれに基づく）を摂ったことにより、脾胃を損傷する；②不消化により、「積滯膠固」を生じ、その中から疳の虫が生じる；③「積滯膠固」が五臓に波及し、「五臓の疳＝五疳」の病となる；④脾胃の虚損により、下痢が続く；⑤脾胃の損傷による虚熱や実熱により、筋肉が消耗し、痩せる；⑥「積滯膠固」が体表にあらわれた症状として、悪瘡ができる；⑦疳の虫により、夜泣きやひきつけを起こす。

4. 曲直瀬道三、ならびに江戸時代の小児五疳薬

室町、江戸時代を通して、小児五疳薬の薬として最も著名なものは「五疳保童園」である。本処方をはじめとし、小児五疳を中心とする室町～江戸時代の処方を検討した。その結果、曲直瀬道三（1507～94）の『啓道集』にみられる、(i) 熱疳、(ii) 冷疳、(iii) 蚊疳、(iv) 疳疳、の処方構成を参考にすることで、多くの小児五疳の処方の意義を明らかにすることができた。すなわち、虚熱や実熱に対し、黄連、胡黄連、蘆薈、青黛；冷えからくる下痢に肉豆蔻、青皮、木香、枳椇子；駆虫に枳椇子、楝根皮、貫衆、使君子、落葵；驚風に、麝香、辰砂、錳退を配合している。多くの小児五疳薬では、これらの薬物を適宜組み合わせることで処方構成していることが理解された。

5. 江戸時代と現代の小児五疳薬の比較

江戸時代の小児五疳薬の主な目的は、小児の脾胃の虚損からくる虚弱体質、腺病体質の治療にあり、夜泣き、ひきつけ等の目的は従の位置にあった。近代における小児五疳の概念の変遷は、近代化に伴い、「疳の虫」が体内の不消化物の中から生まれ、体が痩せ衰える、という病理観を採用しなくなったためと考えられる。